



ヘミングウェイの「白い象のような山並み」

著者	谷口 義朗
雑誌名	英米文學英語學論集
巻	4
ページ	1-10
発行年	2015-03-19
その他のタイトル	Hemingway's "Hills Like White Elephants"
URL	http://hdl.handle.net/10112/8978

ヘミングウェイの「白い象のような山並み」

谷口義朗

ライオネル・トリリング (Lionel Trilling) は自らが編纂した文学のテキスト『文学の経験——フィクション編』(*The Experience Of Literature: Fiction*, 1967) にアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の「白い象のような山並み (以下、下の引用文を除いて「白い象」と略記)」「(“Hills Like White Elephants,” 1927) を入れ、他の作品同様コメントを付しているが、それを以下のような一節で始めている。

アーネスト・ヘミングウェイは、短篇を書き始めて雑誌社に送っては拒否されていた頃、「断り状を付して」返されてきた彼の作品は「必ず短篇 (stories) ではなく逸話 (anecdotes) とかスケッチ (sketches) と呼ばれていた」⁽¹⁾ というふうな思い出を語っている。「白い象のような山並み」もそのような作品の一つだった。1920年代の雑誌編集者がなぜそれを短篇作品ではないとか考えたのか、思いをめぐらしてみるのも一興である。(305-306)

20年代の編集者たちはなぜ「白い象」を短篇作品ではないと考えたのか。トリリングが続けてあげるその理由はそのままこの作品の特質 (それは現在ではもう言い古されたことであろうが) を語っている。トリリングによれば「短篇作品というものはまず語られる (原文イタリック) ものであるのに、『白い象』はほとんど語られていない」(306)。「語られていない」とは、以下の説明からわかるように、結局、作者が自ら語る物語を読者に理解させようという当然の努力をしていないという意味である)「白い象」の「作者はつとめて自らの正体を明かそうとせず、また姿を現わそうともしない」。また「読者とも、自らが語っているエピソードに登場する人物たちとも関わりを持つことを拒否しているように見える」(306)。作品における「場面は最初のパラグラフで設定されるが、このパラグラフは実に簡潔で、厳格に個人の感情を交えない調子のものである」。そして「以後、ほとんどすべては男性と女性の間のやり取りにゆだねられ、作者は酒が出されたとか、男がバッグを駅の反対側にもっていったとか、また二度女性が風景を見たとき何を見たのかを語るために介入してくるだけである。実際、作者はストーリーの中で起こっていることにまったく関わっていないので、登場人物が語る声の調子を描写するという伝統的な方法を利用することさえしない」(306) のである。このように、作品全体がほとんど会話から成り、作者の介入は最低限の状況説明に抑えられていて、決して人物の内部に入り込もうとしないこの作品の手法は劇に近いものであり、この作品でとられている視点を「客観的で、劇的な視点 (the objective, dramatic point of view) (Jauss 第3パラグラフ) と呼ぶ人もいる。しかしこの作品における作者の登場人物たちに対する無関心さは劇的なものを越えていると言えるかもしれない。

さらに作者は男女の外観・容姿についても、また二人の関係についても推測はできるものの決して語ろうとはしない。このような「執拗な沈黙、登場人物にかかわるまい、また彼らについて何も語るまいとする」ヘミングウェイの姿勢が、「白い象」には「逸話やスケッチと比較して、短篇作品が当然もっているべきはずの意味が欠けていると編集者たちに感じさせることになった」(Trilling 306) のである。ただし「意味」と言っても、むずかしく考える必要はなく、短篇作品が「私たちの中に生じさせる、わかったという感覚 (the sensation of understanding)」(306) だと考えればよいとトリリングは言う。そして短篇作品はこの「わかったという感覚」を「私たちのなかにひきおこすことができれば成功なのである」(306)。

最初に「白い象」を読んだ編集者たちは「作者のよそよそしさ、また作者が自分の提示しているものについて明白なコメントをしようとしないことは、この感覚を読者に与えようとする当然の努力を作者がしていない」(306)ということだと感じた。つまり「作者は読者に可能性をひめた人間的状況を示したが、その状況がどのように解明されるべきか、あるいはどのような感情、党派心を作者は喚起しようとしたのかについては語っていない」。また「この短篇作品が結局どんな意味をもっているのか、あるいは結局のところそもそも意味をもっているのかどうか、それについて作者は無関心であるように思えた」(306)のである。トリリングによれば、二十年代の編集者たちはこのような理由で「白い象」を短篇作品(story)として読むことができなかった。

そしてこのような(トリリングが想像する)編集者の体験は多かれ少なかれこの作品の読者にあてはまると言える。最初の場面描写の後に続く二人の男女のやり取りは、まず何を飲むかというごく日常的な話から始まるが、「白い象のように見える」⁽²⁾、「みんなニコリスのような味がする」(212)、「とくに長いこと待ち望んだものはみんなそう、アブサンみたいに」(212)など意味ありげな言葉をさしはさみながら進んでいく。それらのことばが何か字面以上のこと、特に後者の二つはそれまでに二人の間にあった何らかのことに言及しているように思えるのだが、それが何かは分からない(結局、最後まで明らかにされることはない)。やがて男が「ほんとに簡単な‘operation’なんだよ、ジグ」(212)と女性に向かって、実は二人の間でずっとくすぶっていた本当の問題を持ち出す。すなわち女性は妊娠しており、男は女性に‘operation’=「手術」、すなわち「中絶手術」を受けさせたいと思っているのである。だが男の要望にもかかわらず、女性はしたくないとおそらく本能的に感じている。

しかし読者がそう言えるのは、二人の間のそうした事情がつかめた後の話である。最初はこのことがわからぬまま作品を読み終えてしまう場合も十分にありえるだろう。だいたい‘operation’という語にはいくつかの意味があり、また「妊娠」、「中絶」という言葉がテキスト上に現われることは最後までないのである。原則的に読者は二人のやりとりをいわば「立ち聞き」(Jauss 第1パラグラフ)しているのであり、そこから理解できるだけのことしか理解できない。彼らの間で「中絶」ということが問題になっていることが分かったのも、幸運な「偶然」(Trilling 306)だと言すべきなのである。

しかし「白い象」の読者を突き放すその「よそよそしさ」はいつまでも読者を寄せつけないほどのものではない。あの「わかったという感覚」はそのよそよそしさにもかかわらず遅かれ早かれやってくる。そしてそれがやって来るのに少し時間がかかるがゆえに、その分だけ訪れる感覚は快い。それは「白い象」の読者の多くにあてはまるものであり、それを得ることのできる読者をきびしく限定するほどのものでもないのだ。その遅れてやって来るがゆえにより快い「わかったという感覚」と、しかし解けないなぞも残るといふこと、それがこの作品を多くの論考の対象として取り上げさせた一つの要因ではないかと思える。

わからないことの一つは中絶手術についてジグが最終的にどういう決断をしたのかということである。列車が到着する時間が近づき、男はジグをテーブルに残したまま荷物を反対側のホームに運んで行く。戻ってくるとき彼は酒場に寄ってアニス・デル・トロを一杯飲み、それからジグのところまで帰ってくるのだが、ジグはその男を微笑みをもって迎える。またその前、男がバッグを運んで行こうとした時にもジグは男に向かって微笑んでいる。この微笑みはジグが中絶手術に対して何らかの決断をしたことを示していると一般に受けとられているが、それは実際そうであると思われる。しかしジグはどのような決断をしたのか、その微笑みは何を表しているのだろうか。この問いについて考えるためには、物語を締めくくるその場面——ジグが微笑みを浮かべて男を迎える場面までをまずはくわしく追っていかねばならない。

上でふれたように、物語の場面は第一パラグラフで設定される。場所はスペインのエプロ川の

流域にある乗換駅 (a junction) で、かなたに長く白い山並みが見える。駅からその山並みに向かって広がる土地には影がなく、木もまったく生えていない。駅は二つの線路にはさまれて陽光を浴びている。建物の影が駅舎に貼りつき、駅舎の中にある酒場の入り口は開かれたまま、ひもに竹のpeesを通して作ったカーテンが蠅よけにかけられている。アメリカ人の男 (the American) と若い連れ的女性 (the girl) がその外におかれたテーブルに座っている。暑かった。あと40分したら (二人が待っていると思われる) パルセロナ発の急行列車が到着することになっている。その列車はこの駅に2分間停車してマドリッドに向かうのである。(212)

このパラグラフでは明らかにされないが、線路をはさんで風景が大きく二分されている。男女がいるのは駅の北側で、今述べたように木も生えておらず、「土地は褐色に乾いている」(212)。そしてかなたに白く長い山並みが見える。ジグの言う「白い象のような (like white elephants)」山並みである。反対側 (南側) には「穀物畑」が広がり、「エプロ川に沿って樹木が茂って」いる(213)。かなたに「山脈 (the mountains)」が見える (213)。後で触れるが、線路をはさんで広がるこの対照的な風景は女性にとって象徴的な意味をもつものとなる。

二人のやり取りはこうした風景を背景にして始まり、以後、最低限の状況説明をはさみながら進行していく。二人はまずビールを注文するが、酒場の女がビールを運んできてテーブルにおいている間、女性は遠い山並みを見ている。それが陽光を浴びて白く見えること、土地が褐色に乾いていることが言及される。(山並みが白く見えることについては出だしの一節に続いて二度目である。今は直接関係がないが、それが女性の意識を捉えていることを示すと同時に読者の注意をそれに向けることが意図されている、と解釈できる。) そして女性が「あの山なみ、白い象のように見えるわね」と言うと、男は「白い象なんて見たことないな」と素っ気なく答える (211)。すると女性が「そうね、見たことないでしょうね、あなたは」と言い返し、男も「見たことあるかもしれないぜ。ほくが見たことないってきみが言ったって何の証明にもならない」とやり返す (211)。二人の間になにか「対立」(Weeks 75) があることが暗示される。男は明らかに不機嫌さを漂わせている。しばらくあとで男は申絶手術のを持ち出すことになるが、このあてつけのような不機嫌は意識的なものであるにせよないにせよ、女性にその力を及ぼしている。「(ビール飲みましょうよ) (211) とか、「(アニス・デル・トロを) 飲んでみる？」(211) という女性のことばに男が直接答えず、それぞれ「ビール二つ」(211)、「アニス・デル・トロを二つくれ」(212) とそのままカーテンの方にあるいは酒場の女に向かって言っているのも、考えてみれば、女性へのあてつけだとみることもできるだろう。

今述べたように男の圧力を女性はもちろん敏感に感じとっている。かなたに見える山並みを「白い象」にたとえたとき、男に冷たくはねつけられて彼女は黙ってpeesのカーテンを見つめたが、何とか抵抗の糸口を見つけたそうとせずにもおれない。彼女がアニス・デル・トロを一口飲んで「リコリス (甘草) みたいな味がするわね」と言った時、男は「みんなそんなもんさ」と答える (212)。これに対して女性は「そうよね。みんなリコリスのような味がするのよね」と皮肉っぽく言い、「とくにあなたが長い間待っていたものはみんなそう、アプサンみたくに」と言いつのると、男が「やめろよ、その話は」と (たぶんきつい調子で) 言い返す (212)。明らかに男は痛いところを突かれたのである。(しかし何を突かれたのかは読者には分からない。二人の間にあったある事象に言及していることは明らかだとしても。) ⁽³⁾ 「やめろよ」という男の言葉に、彼女は「あなたが始めたのよ。……私は面白かった。楽しかったんだから」と言い返す (212)。自分にそんな皮肉を言わせたのは男自身だ、彼女の気持ちを無視して自分の願望を押しつけようとするような男の態度だと女性は言っているのである (と思われる)。

女性の逆攻勢の勢いに押されたのか、その後、男は態度を和らげる。山並みを白い象にたとえたあの比喩は「気が利いてなかった？」という女性の問いに、「気が利いてたな」と男は答える (212)。女性も少し譲歩するかのように、山並みが本当は白い象に似てなどいないこと、自分はた

だ木の間を透かして見える山肌のことを言っていたにすぎないことを認める。それから男がもう一杯飲もうかと提案し、「ビールがよく冷えててうまいな」と言うと、女性も「おいしいわ」(212)と答えて険悪な雰囲気為何とか回避され、修復されたかに思えたそのときを見計らったように男が切り出す。「本当にすごく簡単な手術なんだよ、ジグ。……手術なんて言えないくらいだ」(212)。ジグは答えることができず、テーブルの脚がおかれている地面を黙って見つめる。

男の説得はこの話が始まる前から続いている (Hannum 74) のであろう。だがその手術を彼女はしたくないと本能的に感じている。しかしその気持ちを言葉にして男に言い返すということが彼女にはできない。だから恨みがましく、皮肉なもの言いで男に対抗することになる (あるいはしかできない) のである。(リコリスの話の時は男の弱みをうまくつけた。) ジグは時にはたぶんわがままを言いながらも男に服従してきたのだろう。彼らの間にはかなりの年齢差もある (男が ‘the man’、ジグが ‘the girl’ と呼ばれていることから、そう推測されうる [Trilling 306])。しかし白い象の比喩について男が「気が利いてたな」と答えた後、ジグは、自分は「(楽しもうとしていた、そして) この新しいお酒も試してみたかったのよ」(212) と言い、ふとそんな自分たちの生活に嫌悪を覚えたのか自嘲的に男に呼びかける。

“I wanted to try this new drink: That’s all we do, isn’t it—look at things and try new drinks?”
(212)

男は「そうだな」(212) と答え、ジグははるかな山並みを見つめる。山並みは彼女の目には美しく映っている。というのは彼女が「すてきな山並みね (“They’re lovely hills”）」(212) と言うからである。彼女が山並みを見ていることが言及されるのは二回目だが、「いろんなものを見て」というフレーズと一行へだてて並べられた時、その山並みは、そうした「いろんなもの」とはまったく違う意味を帯びて (むしろはるかに彼女の夢を投影したもの [Hashmi 75]) として存在しているように思える。「白い象のような」という比喩は、「白い象」の故事にもとづいて、「厄介なもの」、「持て余しもの」といった「決定的な」(Trilling 306) 意味をもつことになるとしても、この山並みはこの時の彼女にとって「すてきな山並み」でしかない。「白い象のような山並み」は、彼女には一面では無関係にその意味を変容させることになる。

中絶手術の件が、はっきりと男の口から出て、このことを巡る二人のやり取りがしばらく続く。男はその手術がいかに簡単であるかを説き、ジグに返答を迫る。彼女は男の説得を受け入れることはもちろんできず、しかしそうかといってはっきり反論することもできずに皮肉な恨みがましい返答を繰り返すばかりである。そして男はジグの皮肉な答えの反発を食うと、「したくないのなら、しなくてよい」(213)、「本当にしたくないなら、させはしない」(213) という主旨の言葉を繰り返し、中絶はあくまでもジグの自主的な決断ということにしようとする。結局、男にとってジグの妊娠は「おれたちを悩ませているのはそれだけなんだ。おれたちが楽しくないのはそれだけのせいなんだよ」(212) という類のものであり、だからそれがなくなれば自分たちは元どおりになれるのだと男に言われた時、ジグは自分の妊娠がそんなふうにはか考えられていないことに深く傷つき、思わず手をのばしてビーズのカーテンをつかむのである。ジグは手術を迫る男のあまりの執拗さに、自分が受ける手術であるのに「あなたは本当にしたいの」と、男を主語にしてたずねさえる。

“And you really want to?”

“I think it’s the best thing to do. But I don’t want you to do it if you don’t really want to.” (213)

ジグの問いに男は「それが一番いいと思うんだ」というふうに、自分の思いということとは別の

方向に話をそらして客観化しようとし、ここでも自分の責任を逃れようとする。ヘミングウェイはこうした男の身勝手と不誠実とさもしさを執拗に描いているが、それはジグのいわば自分の生への覚醒にいたる過程に真実味を与えるためではないのだろうか。ジグと男の「手術」をめぐるやりとりはさらに続く。上の引用に続く部分である。

“And if I do it you'll be happy and things will be like they were and you'll love me?”

“I love you now. You know I love you.”

“I know. But if I do it, then it will be nice again if I say things are like white elephants, and you'll like it?”

“I'll love it. I love it now but I just can't think about it. You know how I get when I worry.”

“If I do it you won't ever worry?”

“I won't worry about that because it's perfectly simple.”

“Then I will do it. Because I don't care about me.” (213)

はじめの方は、ジグが男の口から欺瞞的な 'love' という言葉を引き出すための誘導尋問のように聞こえる。愛しているはずのない男から「愛している」という言葉を引き出して、その欺瞞を確認する。そして「ぼくがきみを愛しているのはきみだってわかっているだろう？」と言う男に、ジグは、それは分かっているが、「もしわたしがそれをしたら、わたしが何か白い象のように見えると言ってもすてき感じられて、あなたも気に入ってくれるのね」と言うと、男は「とても面白いと思うだろうよ。今だってそうだけど、今はそういうことは考えられないんだ。心配ごとがあるときはぼくがどうなるかきみも知っているだろう」と答える。そこで彼女は「もしわたしがそれをすれば、あなたは心配がなくなるのね (If I do it you won't ever worry?)」とたずねる。すると男は「それについては心配ないさ。ほんとに簡単なんだから (I won't worry about that because it's perfectly simple.)」と返答する。男は「それ (=手術) については」と限定している。ジグは手術が自分に及ぼす影響も含めて「心配がなくなるの」とたずねているのであろうが、男はさすがにそれをそのまま認めることもできず、「それについては」と限定して再び論点をはずしている。そこでジグが反撃する——「それじゃ、やるわ。わたしなんてどうなったっていいんだから」。

“Then I will do it. Because I don't care about me.”

“What do you mean?”

“I don't care about me.”

“Well, I care about you.”

“Oh, yes. But I don't care about me. And I'll do it and then everything will be fine.”

“I don't want you to do it if you feel that way.” (213)

「自分なんかどうなったっていい」という彼女のことは、ジグに対する男の態度がそのまま跳ねかえって表現されている。このような反転した言い方でしか、彼女は男に対する自分の気持ちを表わすことができない。そういうところに、ジグと男の力関係とジグ自身の未熟さが表れていると言えるが、男の気持ちはどうあれ自分はどうなってもいい、だから手術をする、そして何もかもうまくいくのだから、というジグのことは、また男は「きみがそんなふうに感じているのならしてほしくないな」と、それまでに何度か繰り返してきたと同様なセリフを口にする。そしてそのあとにこの男女のやり取りにおける一つの山場が訪れる。男のセリフを聞いてジグが何を感じたのか、もちろんそれが直接描かれることは原則的にもないが、ジグは立ちあがっ

て駅の端まで歩いて行き、線路をはさんで逆の方向にある景色を見る。

そこには今までジグたちがいた「褐色に乾燥して」いる土地とは対照的な風景がある。穀物畑が広がり、エプロ川に沿って樹木が茂っている。川のかなたに山脈が見え、樹木の合間に川自体も見える。景色を見ながらジグは次のような言葉を発する。

“And we could have all this,” she said. “And we could have everything and every day we make it more impossible.” (213)

つまり彼女はその植物の繁る豊かな景色のなかに自らの願望を読みとっている。あるいは風景に自分の願望が読まれている。風景と彼女の意識の関係は相互作用的である。これとは少しレベルの違う問題だが（無関係ではないけれども）、とくにこのあたりの書き方は、人物の内面には立ち入らないというヘミングウェイの原則からももちろん生じるものであるが、字面としては「会話の部分と解釈されない風景の一瞥がお互いを解釈する（dialogue and uninterpreted glimpse of scene interpret each other）」（Hollander 216）というかたちで表われている。つまりここでは「褐色に乾燥した」土地から視線を転じて見られたエプロ川の流れる側の風景がジグのセリフとお互いを解釈し合っているのである。もとに戻るが、ジグはここから反撃というか積極的な攻撃に転じる。それは彼女が眼前の風景を見て本当の自分の願望——平安で豊かな生活に対する願望をはっきりと認識したからである。そして彼女は「私たちはすべてのものを手に入れることができるのに、毎日だんだんそれを不可能にしている」と、男に対して自らを主張し始める。あきらかに彼女は今明確に認識した自らの願望の観点から、自分たちが現在送っている不毛な生活に強い疑問を突きつけている。彼女のその言葉に対して男は「なんて言ったんだ」（213）と聞き返し、彼女は言葉を続ける。

“I said we could have everything.”

“We can have everything.”

“No, we can't.”

“We can have the whole world.”

“No, we can't.”

“We can go everywhere.”

“No, we can't. It isn't ours no more.”

“It's ours.”

“No, it isn't. And once they take it away, you never get it back.”

“But they haven't taken it away.”

“We'll wait and see.” (213)

男は現在の「いろいろなものを見て、新しい酒を試してみる」ジグとの（性）生活をそのまま続けたいというだけの立場から皮相な答えを続ける⁽⁴⁾。ジグは男の言葉をすべて否定する。最後から3行目の「いったん奪われたら、もうとりかえせないのよ」というジグのことは、彼女が妊娠している子どもと重ねて読むことも可能である⁽⁵⁾。「しかしまだ奪われてはいない」という男の返答に、ジグは「今にわかるわよ」と答える（213）。男はジグに「そんなふうに考えちゃいけない」と言い、「きみがしたくないことをしてほしいとは思っていない」とも言う（214）。この後、ジグは一度「話すのをやめない？」（214）と男に向かって言っている。

ジグは日陰に戻り、二人ともテーブルにつく。この時、ジグは「流域の乾燥した側にあるかなたの山並みを眺め」、「男は彼女と、それからテーブルを見る」（214）。男の視線は目の前の現実

に貼りつき、ジグの視線はかなたにある、現実を越えた想像を誘うものに向かう。二人の視線の向かう対象の対照性が示されている。男はこの後、したくないことはしてほしくないと繰り返すが、しかし彼にとってはおそらく触れたくない話題にも触れて、子供のいる生活がジグにとって意味のあるものなら自分はそれに堪えるつもりだと言う (214)。(だがもちろん「子供のいる生活」と明白に言明されるわけではなく、代名詞 'it' で暗示されるだけである。)「あなたにとって意味はないの。わたしたちやってゆけるわよ」と聞き返すジグに男は、もちろんあるが自分はジグ以外には誰もいららないのだと欺瞞的なことを吐き、さらにまた手術の簡単であることをつけ加える (214)。そこでついにジグも憤りを抑えきれず、あの「お願いだから話すのをやめてくれない」という「お願い (please)」を7つ連ねた、おそらくヒステリックな声をあげるのである (214)。

その勢いに男は何も言わず、ただ駅の壁にもたせかけたバッグを見つめる。バッグには彼らが夜を過ごしたホテルのラベルが貼ってある。それに象徴されるような生活というよりジグ自身を失うことを恐れたのか、男はとりあえず「でも君にはしてほしくない、全然かまわないんだよ」(214)と手術をしなくてもよい、子供のいる生活を送ってもかまわないということをお口にす。ジグはたまたまなくなって「大きな声を出すわよ」(214)と言う。

この後、酒場の女性がビールを運んできて、あと5分で汽車が来ることを告げる。男に女性のスペイン語を翻訳してもらった後、ジグはありがとうと彼女に向かって明るく微笑みかける。男が「バッグを駅の反対側に運んでおいた方がいいな」(214)と言い、バッグを反対側の線路の方に運んで行くが、ジグは男がそう言ったときにも男に向かって微笑む。戻ってくる時、男は酒場に寄ってカウンターでアニス・デル・トロを一杯飲み、そこで同じように酒を飲みながら汽車を待っている人々を見る。その時、男が見た光景は「彼らはみな分別よく (reasonably) 汽車を待っていた」(214)と描かれる。男がビーズのカーテンから出てくると、ジグはテーブルに座ったまま、この時も男に向かって微笑みかける。「気分はよくなったかい」と聞く男に、ジグは「いい気分よ。……大丈夫、なんともないわ (There's nothing wrong with me)。いい気分よ」(214)と答えて、「白い象」は幕を閉じる。

トリリングは上の 'reasonably' という語の使われ方、すなわち「分別よく (待つ)」という言い方のこの場面における奇妙さに注目し、そこからこの語の作品における重要性を引き出している (307)。登場人物の内面に立ち入らないというヘミングウェイの書き方の原則から言えば、この 'reasonably' という語の使用はそれに反している。「分別よく (待つ)」というのは酒場で列車の到着を待っている人々を見て抱いた男の印象、感想を示すものだからである。ヘミングウェイはその原則を破って男の思いを読者にのぞかせた。読者と登場人物の間に保っていた一定の距離を縮めたのである。もちろんその必要を感じ、その効果を信じたということなのだろう。いずれにしても、男には酒を飲みながら汽車を待っている人々が「分別よく」待っているように見えた。しかしなぜ男は「人々の分別のよさに肯定的に注目し、それについて語るのか?」、トリリングはそう問い、それは「分別のある人間である彼が、分別のない女性を説得するのに苦労しているからだ」(307)と答えている。

(最後のジグのセリフにおける 'wrong' という語 ['reasonably' がある行の3行下に現われる]が、この 'reasonably' と対比されて、その意味を強調されているかもしれない。もちろんこれは男に「気分はよくなったかい」と聞かれて「大丈夫よ (There's nothing wrong with me)」と答えているわけだが、自分には「おかしな (wrong)」ところ、「まちがっている (wrong)」ところはない、「おかしい」のは、自分を「分別がある ('reasonable') 人間だ」と考えている男の方だと言っているようにとることも可能であろう。)

パメラ・スマイリー (Pamela Smiley) もトリリングと同様の点に触れて、「気分はよくなったかい」という男の最後の質問は「ジグの妊娠、(彼女がそれまでに示してきた) 感情、成長しすべてを変えようとする願望は逸脱であって、彼女はそこから立ち戻らなければならないということ

を前提にしている」(10)と言っている。ジグは男とのやり取りのあいだに自分の本当の気持ちを自覚し、それを間接的なたちではあれはつきりと主張し、中絶手術を迫る男に抵抗してきたのだが、男の側にそれはほとんど痕跡を残すことがなかったということである。

ジグはエプロ川の流れる側の景色を見て「私たちはこれらすべてを自分のものにできるのに……」と口にした後、男としばらく問答を交わすが、それが一段落して男が「日陰に戻って来いよ。……そんなふうを感じちゃいけない」と呼びかけると、「どんな風にも感じちゃいけないわ。……私には分かるのよ」(214)と言う。そのあと「ぼくはきみがしたくないことはしてほしくない」と男が同じセリフを繰り返すと、「私にとってよくないことかもしれません」と受けて、そのあと「わかっているわよ (I know)。もう一杯ビール飲まない?」と答えを返す(214)。この「わかっているわよ」という言葉に、ジグの諦めが表れているように思われる。自分の言いたいことを言った後に訪れた諦めの気持ちであるように思われる。

そのあと男は「いいよ、でもわかってほしいんだけど……」としつこく言い、前にも述べたように、ジグに「話すのをやめなさい」と言われている(214)。そして再び二人はテーブルにつくのだが、その時、ジグは最後に「山並み」を見る。「女性は流域の乾燥した側にあるかなたの山並みを見た (the girl looked across at the hills on the dry side of the valley)」(214)。この「乾燥した側にある山並み」という言い方が、「すてきな (lovely)」「山並み」などという場合と違って不毛なイメージを喚起させようとしているように思える。

最初、ジョン・ホランダーに「サーカスみたいに、鼻とっしほをつないで行進する」象の列を思い浮かべさせた「白い象のような山並み」は、二人のやり取りが進み、やがて中絶のことに移ると、文字どおりの「白い象」ではなく、「白い象」の故事に因んだ「厄介なもの」、「持て余しもの」といった象徴的な意味を帯びてくる。最初のサーカスの象の「喜びと可能性のイメージ」は次第に「暗く狭小な象徴」へと転化していくのである。(214)

ジグは列車がまもなく到着することを知らせてくれた酒場の女性に明るく笑いかけるが、男がバッグを反対側の線路まで運ぶと言った時にも、運んだあと帰りがけに酒場に寄り、アニス・デル・トロを一杯飲んで戻ってきた時にも男に向かって明るい微笑みを投げかける。それはハシュミに言わせれば、今さら怒っても嫌味を言っても仕方がないというジグの諦めの気持ちからくるものである。(以下ハシュミによる)ジグはすでに男との争いに負けたと感じている。汽車はもうすぐにもやってくるし、バッグもすぐに積み込む準備ができている。ジグは中絶手術を受けて男のもとにとどまるつもりである。(男の気持ちはどうかかわからないけれども。)それなら今さらじたばたしたって仕方がない。好ましく振舞い、自ら進んで男の気持ちに従う姿勢を見せるのがよい。そして実際、彼女は先ほどの振る舞いは過去のこと、ちょっとした間違いだったかのように扱おうとする。それが「気分はよくなったかい」という問いに対する、ジグの「いい気分よ。……大丈夫なんともないわ」という返答である。これは弁解と言うべきものであり、それまでの自分はどうかしていた、しかし今は大丈夫だと認めているということである。輝くように明るい (bright) 微笑みも同様である。しかしジグの「いい気分よ」という言葉が二回繰り返されることに彼女が抑えている本当の気持ちが現われているように、ジグの微笑みの「人工的な明るさ (the artificial brightness)」にもそれは明らかに現われている。(80-81)

そして二人の遠景に山並みが浮かぶが、それは「もはや貴重な白い象⁽⁶⁾でも捉えがたくゆらめく夢でもない、一瞬ちらついてそれから消えた他愛もない希望の沈黙した白い墓石」(Hashmi 81) のようである。ジグが中絶手術をした後、男のもとにとどまるのか、あるいは男のもとを去るのか、あるいは男の方が離れていくのか、それはわからないけれども大筋ではだいたい以上のようなことではないかと思われる。

蛇足になるが、スタンレー・レナー (Stanley Renner) は、結局ジグが自分の主張とおし、男を中絶はしないという自分の思いに従わせると解釈している。レナーは「白い象」はジグとい

う人物の性格の発展を軸に展開する物語（28）だが、その女性人物の性格発展の決定的な転回点を示しているのが、彼女が立ち上がって駅の端まで歩いて行く場面だと言う。（以下レナーによる）その時、彼女は男の影響から事実上身を引き離して、初めて自分の心の中にあるものを理解するようになる。ジグが駅の反対側が見える地点まで移動することは、男の支配からの彼女の心の解放と自分の感情（それは彼女が初めて見る駅の反対側の景色によって表される）の発見への発展を示している。（32）

その後、ヘミングウェイは男の偽善を強調して提示する。「お願い（please）」を7回繰り返したジグのことはその後、男は手術に利己的な意図はないと言いながら、スーツケースのラベルを見る。それは彼らが夜を過ごしたホテルのものであり、男が求めているのは邪魔されることのない‘sexual playhouse’なのだ。男の明らかな偽善はジグに「大きな声を出すわよ」と叫ばせる。（32-34）

これが「白い象」という作品における「最大の転回点」で、男はジグのこの激発によって中絶をすることへの彼女の抵抗がいかに強いかを理解し、バッグを反対側の線路に運んで行こうとしてジグの肯定的な笑みを得るのである。そしてこの「反対側」という言葉が実は重要であり、「反対側」はジグの価値観を表す側であって、そちらに入る列車は中絶するためのクリニックがある方へ向かうことはないのである。（34）さらにレナーによれば、男が戻ってきて「気分はよくなったかい」と聞くのは、自分が負けた相手に対するやり返しであり、ジグの「いい気分よ。……大丈夫、何ともないわ。いい気分よ」という答えには、自己満足的な勝利感を感じることができるともかもしれない。（37）

大方の論考とは異なる大胆な意見だが、これに対してはハシュミの以下のような反論がある。それをまとめるとだいたい次のようである。1. レナーによれば、二人は最初乗車するつもりであったのは別の列車に乗ることになるが、文中ではあと五分したらやってくるマドリッド行の列車しか言及されていない。それは人々が酒場で待っている列車であり、男が線路に沿って先の方に目をやった時にまだその姿を現わさない列車である。男は今すぐにもやってくる列車に積み込むためにバッグを運んでいるように見える。だがマドリッド行の列車と別の方向に向かう列車が（ほぼ）同時刻にやってくるとは考えがたい。二つ目の列車についての言及は一切ないのだから。2. 男の自己中心的な性格を考えると、彼女の抵抗を抑えこもうとしつこく圧力をかけてきた後、一転して彼女の願望を容れることについて、またそうする自分の度量の大きさについて、男が一言も触れずにおとなしく屈服するなど考えられない。3. ジグと男は中絶の問題をどれくらいかはわからないが一定期間議論してきたはずだ。そうした議論において量ることができなかったジグの思いの強さを男が一瞬のうちに理解し、それによって自らの将来への計画全体を変えてしまうなどどうして考えられようか。「そうした感性（あるいは降伏）」は男のものではない。（73-74）

ハシュミの反論をまとめるとだいたい上のようになるが、ハシュミの言うように、執拗に中絶手術を迫っていた男が、ジグがその思いを爆発させるということがあったにせよ、急に態度を変えて彼女の願望を受け入れるということは考えにくい。また、同じくらいの時刻に、二人が乗ろうとしていたマドリッドに向かう列車とは別にもう一つマドリッドではない方向に向かう列車があるということも作品に描かれた客観的状況からみてまず考えられない。これは決定的だと思われる。この短い作品においてジグという人物が示す性格の発展ということにもっと注意を払うべきだというレナーの主張はもっともである。しかし彼女が自らの本当の願望を認識し、自分（たち）の生についても客観的に見られるところまでたどりつきながら、にもかかわらず男の要望を容れて手術を受ける決心をするというところにこの作品の悲劇的な側面が存在すると言えるのではないだろうか。

注

- (1) Trilling は出典を示していないが、Ernest Hemingway, *Green Hills of Africa* (New York: Scribner's, 1935) 70 であろう。Kenneth G. Johnston もこの箇所を引用している。(233)
- (2) Ernest Hemingway, *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigia Edition* (New York: Scribner's, 1987) 211. 本文からの引用はすべてこの版による。引用ページはかっこで示した。日本語訳は高見浩訳「白い象のような山並み」、「われらの時代・男だけの世界——ヘミングウェイ全短編 1——」(新潮社、1996年)、293-301頁を参考にした。
- (3) 上記の Johnston によれば、男はかつてジグが性的に興奮するように催淫作用のあるアプサンを飲ませた。そして今、その激情の結果としての望まれない副産物を取り除こうとしている。ジグはそのことを皮肉っている。(237)
- (4) Howard Hannum は男のセリフの後にすべて 'with the abortion' を補って読むように言っている。(51)
- (5) 同じく Hannum によれば、ジグのこの言葉は「男が望んでいるような世界はとりもどすことはできない」ということを言っている。(51)
- (6) 白い象は希少なものとして尊ばれてもいる。Cf. 'white elephant'=a rare albino variety of elephant which is highly venerated in some Asian countries. (*The Oxford English Dictionary*, 2nd ed.) したがって 'white elephant' の意味は両義的なものとなる。

引用参考文献

- Fletcher, Mary Dell. "Hemingway's 'Hills Like White Elephants,'" *The Explicator* 38.4 (1980):16-18.
- Hannum, Howard. "'Jig Jig to Dirty Ears': White Elephants to Let." *The Hemingway Review* 11.1 (Fall 1991): 46-56.
- Hashmi, Nilofer. "'Hills Like White Elephants': The Jilting of Jig." *The Hemingway Review* 23.1 (Fall 2003): 72-83.
- Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigia Edition*. New York: Scribner's, 1987.
- Hollander, John. "Hemingway's Extraordinary Reality." *Modern Critical Views: Ernest Hemingway*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1985. 211-16.
- Jauss, David. "From Long Shot to X-Rays: Distance and Point of View in Fiction Writing." *The Writer's Chronicle* 33.1 (2002): 5-12. *Association of Writers & Writing Programs*, org. Web. 25 Dec., 2014.
- Johnston, Kenneth G. "'Hills Like White Elephants': Lean, Vintage Hemingway." *Studies in American Fiction* 10.2 (Autumn 1982): 233-37.
- Justice, Hilary K. "'Well, Well, Well': Cross-Gendered Autobiography and the Manuscript of 'Hills Like White Elephants.'" *The Hemingway Review* 18.1 (Fall 1998): 17-33.
- Lanier, Doris. "The Bittersweet Taste of Absinthe in Hemingway's 'Hills Like White Elephants.'" *Studies in Short Fiction* 26.3 (1989): 279-88.
- Link, Alex. "Staking Every Thing on It: A Stylistic Analysis of Linguistic Patterns in 'Hills Like White Elephants.'" *The Hemingway Review* 23.2 (Spring 2004): 66-74.
- O'Brien, Timothy D. "Allusion, Word-Play, and the Central Conflict in Hemingway's 'Hills Like White Elephants.'" *The Hemingway Review* 12.1 (Fall 1992): 19-26.
- Renner, Stanley. "Moving to the Girl's Side of 'Hills Like White Elephants.'" *The Hemingway Review* 15.1 (Fall 1995): 27-41.
- Smiley, Pamela. "Gender-Linked Miscommunication in 'Hills Like White Elephants.'" *The Hemingway Review* 8.1 (1988): 2-12.
- Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*, Boston: G. K. Hall, 1989.
- Trilling, Lionel. *The Experience of Literature: Fiction*. New York: Holt, 1967.
- Weeks, Lewis E. Jr. "Hemingway Hills: Symbolism in 'Hills Like White Elephants.'" *Studies in Short Fiction*: 17.1 (Winter 1980): 75-77.
- Wyche, David. "Letting the Air Into a Relationship: Metaphorical Abortion in 'Hills Like White Elephants.'" *The Hemingway Review* 22.1 (Fall 2002): 56-71.
- 辻裕美「交差する言語と身体——『白い象のような山々』における発話の行為遂行性」、『ヘミングウェイ研究』6 (2005) : 87-97.
- 並木 信明 "Hemingway's 'Hills Like White Elephants': A Triangle of Journey, Life and Love." 『秋田経済法科大学経済学部紀要』12 (1990-3) : 29-39.
- 野依昭子「ヘミングウェイの "Hills Like White Elephants" に見られる『繰り返しの技法』」、関西学院大学『英米文学』46 (1) (2001-11) : 50-65.
- 前川 利広「"Hills Like White Elephants": 対立する二つの世界」、熊本大学『英語英文学』37 (1994-3) : 202-209.
- 李春喜「Hemingway の "Hills Like White Elephants" その内容と形式」、関西大学『英文学論集』39 (1999-12) : 181-94.